

三年七月、復員船「高砂丸」に乗船でき、激しい船酔いで食事もできず、船内平穩の中、ようやく舞鶴に上陸し帰還を果たすことができた。

直ちに入院との医師の言を断り、診断書をもらい、故郷での入院を決めた。

我が家では一家挙げて帰還を喜んだが、ようやく歩ける程度なので自宅で静養していたが、腰椎カリエスと右肢関節炎が悪化し、自宅で治療し松葉杖で歩行可能になるまで十年を要した。

## シベリア抑留記

福島県 石黒庄七

### 出生から入隊

大正八年三月十八日、旧田村郡中郷村大字滝字高野九六番地、石黒家に長男として生まれ、昭和九年、中郷小学校高等科を卒業。その後農業に従事。青年学校に入学。

昭和十四年徴兵検査を受け、甲種合格。昭和十五年一月十日、朝鮮咸興歩兵第七十四連隊歩兵砲中隊に入隊。

昭和十六年七月、虎動員当時被服係をやっていたので補充隊へ。昭和十七年十一月満期除隊。帰郷後、在郷軍人会役員、青年学校指導員等を歴任。

昭和十九年二月十八日召集。会津若松勲一一九〇三部隊末田中隊に入隊。三月六日、千島列島の新知島新知湾に上陸、新月原中浦地区に駐屯。同年九月ごろ、得撫島に転進。三島湾上陸。速射砲第四分隊長とした隊員十七名とともに第三中隊に配属。三島湾に陣地を構築、警備に当たる。

昭和二十年八月、北海道に転進命令。八月十五日、同島において終戦。

### ソ連軍侵攻前後

九月ごろ、三島湾に黒い船が入港。こちらから白旗を立てた大発が交渉に行き、二時間くらいで帰る。すぐ武装解除命令で、明日、小銃、銃剣その他を背負ってしのため原に搬入、武装解除。その次の日、ソ連軍

侵攻。大砲、食糧等の揚陸作業の使役、言葉のわからないソ連兵に使われる悔しさ。敗戦をひしひしと感ず。今や子供同様、致し方なし。その後、内地に帰すのことでひとまず安堵いたしました。帰るに当たり何でも持てるだけ持てとのことで、各人持てるだけ準備をする。

九月下旬、大きな貨物船が入港。その船で内地に帰すとのこと。皆喜んで乗船。船倉に一個大隊くらい入れられ、船内は人の息で三〇度以上のむし暑さ。大小便は、三階くらいの高さの鉄はしごを登って甲板のメートル四方の出入口から出たり入ったり。甲板にはソ連兵がいて、用がすんだら船内へ。乗船後二日くらいで船は北上するとの話。そのうち白い家が見えるようになり、そのうち狭い入江を半日くらい進み、ポーツワニ港に入港。二時間後、下船命令。異境の地への第一歩である。これから四十キロくらいは行軍のとこと。戦争に負けた哀れな姿。港を出ると早く着いた同胞が柵の中で、物ががない、大事にするんだなどと口々に伝える。四キロくらい歩くとドイツの捕虜が焚き火

をしており、その分所に私たちが入ることになった。次の日一日、身の回りの整理、休養となる。次の日から鉄道作業、大きな貨車に石積み作業である。メートルの高さに積むのがノルマである。石が多い所は時間内に積めるが、石がない場所では積めない。積めないときは時間延長で積まれた。

それから間もなくシベリアの厳冬。三交代の作業である。特に夜間作業は寒さ零下三〇度までは働いたのである。今思い出してもぞっとする。

二十一年、分所を転じてOKとなり、休養分所で休養。三カ月で検査、また労働分所へ。その後はゾーナ作業。二十三年ごろ、通信作業。電線延長、架設、柱立て、補修。作業は一個班三十人。ソ連の証明書を持って日本人だけの作業で、各分所を転々移動。歩哨がないので、若干のんびりと作業ができた。ポーツワニよりテルマの間と思うが、地名は定かでない。

二十三年三月ごろ、テルマ付近の分所でまた鉄道作業に。毎日二、三人集まればダモイと食い物の話ばかり。本当に死んでいいのか、生きた方がいいのか、人

間個人の弱さを痛切に感ずる。でも一度帰って、自家の井戸水を飲んで死にたいと考え、毎日の苦痛に耐えて頑張る日々でした。

二十三年ごろは日本人委員会もでき、日本新聞も発刊され、日本の情勢、帰国の情報等知ることができ、体さえ丈夫だと帰国できると、望みを捨てないで頑張るようになった。

その年の十月ごろ、グモイも望み薄のある日、午後四時、作業交代のため現場に着く。前作業班の班長が、兵を町へパンを買いに二人やったが帰らないので分所に帰れないので、どうか体の弱い者二人貸してくれないかと言われ、日本人同士のことと思い二人貸すことにした。私も、必ず帰ってくると町の方向を真剣に注視していたが、五時になって六時になって二人の姿が見えない。歩哨は、兵はいるかと再三問う。帰ってくるかと信じてと答える。夜十時になって姿がない。歩哨は、兵がいなければお前はチョロマだと言う。

あの時ほど命の縮む思いをしたことがない。ついに

交代するまで帰ってこなかった。

八時間の作業が終わわり、二人欠員で分所に帰る。衛兵所で事情を聞かれ、生きた心地なし。でも所長、日本人委員会の話し合いで事なきを得ました。兵は町でゲーペーウに捕らえられ、所長が行ってもらい下げしたとのことで安堵しました。ちょっとしたことで罪人になるので、あの時のことは今もはっきりと脳裏に焼きついている。その年も暮れ、二十四年を迎え、帰国も本格的になされるようになり、八月ごろ、帰国のためナホトカへ貨車の旅。ハバロフスクで「信洋丸」船内吊るし上げ事件を知る。

一日くらい後ナホトカ着。ナホトカには二万人くらいの人が帰国を待ってごった返し、三、四日後、乗船者と呼ばれ、やっと帰れるかと安心する。九月十五日ころ「英彦丸」に乗船、二日後、懐かしの日本、舞鶴港上陸。

いろいろ調査等をされ四日後出発、懐かしの福島へ。四年九カ月の抑留生活。よくぞ生きて帰れたと信じられないくらい。あの苦しみに耐えてきた精神力と仲間

の励ましがあつたればこそ生きて帰れたと思います。

家族も皆無事で留守を守ってくれ、感謝の外はございません。昭和二十五年より農業。

ソ連抑留者として一時は注視されたが、不屈の精神力で社会の一員として注目されるようになり、農業も規模拡大して現在に至りました。毎日老人クラブ活動。当地の銘木、天然記念物の三春滝桜の保存会員として、滝桜の手入れ、接木による育苗等、充実した毎日をごしております。

## 運命の糸

石川県 高松正朋

人間はいつ、どこで、どんなかたちで死ぬか——それはすべて運命の糸に操られているといつてよい。

昭和二十年五月、満州建国大学前期三年に在学中だった私は、勤労働員で奉天の造兵廠で手榴弾作りに汗を流していた。既に戦局は敗色濃厚となっていたが、先

輩は次々と入隊していった。そのころ、私は海軍にあがれていたが、海軍予備学生の試験よりも早く、関東軍から「輜重兵として綏陽の部隊に入隊せよ」という命令書がきてしまった。

輜重輸卒かと落胆していたら、三日後にまた赤紙がきた。先の入営命令を変更して「工兵として吉林の機動第二連隊に入隊」となっている。軍ではどのようにして兵科や部隊を決めていたのか知らないが、一枚の赤紙が当時の若者の運命の糸となったのである。

もし海軍に入っていたら、恐らく南溟なんめいの藻屑と消えていたであろう。後で聞いた話であるが、綏陽の輜重兵部隊は国境で全滅したとのこと……私は工兵の糸をつかんでまず第一の関門を通過することができた。

東満国境老黒山で陣地構築をしていた私たちの部隊も、八月九日不法侵攻してきたソ連軍と戦うことになった。しかし、旧式の三八式歩兵銃ではソ連軍の自動小銃に太刀打ちできず、多くの戦友が戦死した。

敵は我方の機関銃に集中攻撃をかけてくるので、機関銃手は次々と斃れてゆく。工兵の私は機関銃を手